074675-001-7

特23-228

精神教育帝国琵琶錬磨集

吉水　錦翁／編

M37-42

CEJ-0189

特23 ~~特48~~
228 ~~348~~

一 自序

[illegible]丹子ハ[illegible]ハ[illegible]ハ印刷したるものの飯牧例書抽[illegible]

不文ヲ行ヒ誤字書損小乗注書したるものの[illegible]

[illegible]誤拙ヲの[illegible]ヲ見ますと思ふ

孫叅の事

一 [illegible]源叅せしと称せ[illegible]一文章代を源と理解し

大小の医[illegible]とう解し[illegible]の人とありしく孫叅すし

御[illegible]ハ序故急を写者とあると叅者の本をハ部

と為す[illegible]本ヲ訂りと解とすることあるを

明治
37 1. 21
内交

一 文字の匹偶とハ文章に匹偶ありて人の文能の匹偶
藏に服と節の匹偶とハ輪者等し知るべし
一 文章の主体と匹偶とハ断じきれハ読者結入易り
而して語法の強弱及長短も識別すべき事

掛辞の事

一 雅俗ハ静粛にして黙聴する所なり然とハ掛辞
ハ情遣(セマ)り越極まりて満腔の熱情切なる調子すれ
ばなほ不激なるのみならず又た読者過ぐ気有りく
掛かるもの汎く普く以りてハソライゲとの

「ソラヒゲ」との以て言語ハ普く通りて野鄙(ヤヒ)劣等(レツトウ)の言辞
にして文章に意味を解せぬ読者の為めのたる故知るべし
即ち卑猥の発言なりと云ふべし故なるに至は至極紳士淑
女の無きと憎むべき所なりと離ふまじく議をなせは実ふ此
喜劇たり思ふに卑賤の劣等者の下鄙野の辞をも家
に輸入せむらしめるハ無謀の至り甚として弱とに誤ち
しめたらしめらるくもくと遺憾の事甚也又種々の冷
語ば皆ともの毎り侮辱せ若に失すれ能はざるも
嘲笑ハ反省でしるれ切なき所となし即く己うん

時の拙劣を顧みず表すのみなるべきの
浅学ハ仮令拙きを補ふに文章の時ハ
味と令和一始終己の身に反求し
練ハ初の心を変ぜんと欲するも能はざる
にあらずと亦曰ふべし
文に泊意して可ならん
時に文化三年(ミツマ)丙寅六月十二日九ツの夜
編者志る

陸奥集巻之一

目次

一金剛石、玉壌、　一枚目
一武蔵野、　二枚目
一青山墓、　三枚目
一青の洞、毋れ敷　四枚目
一天長節、　五枚目
一行春や行き、　六枚目
一湯陽江、　七枚目

一小督、　十一枚目
一五月雨、　十三枚目
一元寇の仇波、　十四枚目
一古湾入、　十五枚目
一城山、　十八枚目
一勢代市旗、　十九枚目
一本能寺、　二十二枚目
一白帆隊、　二十五枚目
一奇縁、　二十八枚目
一吹雪代数、　三十一枚目
一石童丸、　三十三枚目
一吉野落、上　三十七枚目
一仝　下　三十九枚目

計二十一首

并二老（不日出版）
蓬莱山、玉瓶、若の木、芍本代花、解脱（ゲダツ）の美、橋供、
送別、七つ落、貴花、西の京、忠義、感謝、海軍、宮の古垣、
安閑伝、宝（ハの）房宮、熊七湾美、俊寛、仁敦盛、仁

第三卷（全上）

長歌のたぐひ、武士魂、歌聽會、芙蓉峯、述懷擬、
古人、義、道の聚、豆腐君、靈鷹、法師、大和魂、豆腐
漫吉、毒饅頭、小柿公仁中河中義、涙の為上
第四卷以下ハ古今を括之一及新撰狂歌刷
新版出ずるものとす

精神教育研究會主任人位吉水鶴翁編輯兼著書

辣磨集卷之一

白石宮澤平治製

金剛石ハ石ハ武士ハ人を学ひて
なにこそ、まことの道をあらはすれ世の乱れ
なくめぐるのめぐ世の習ひとて日月星辰ハ
いつなる日をのあらさむ水ハうつ波ハ立ひて主君
にありぬすりハ交る変にたりぬ

うるはしく、こゝに詰るとき、変を求ひ求めて、石垣に、
人の絵にもちゐて、学人の絵ふ[illegible]、

仝上

玉壌

此ハ明治の二十七、八年戦争の[illegible]、支那に於て急流を、
たゝ樹の間ふ[illegible]、玉壌城にをつけ、砲墨あまる
きつ砲たて、盛字奉旗数字軍や、[illegible]外諸軍さき
まゝく隊をみるに、[illegible]、[illegible]男の兵[illegible]、
砲煙弾雨をおかして、すゝくと勇ましく面を

[illegible]攻[illegible]、[illegible]の[illegible]ふと[illegible]
たつ煙のうちに、[illegible]の上ふ日[illegible]、[illegible]
[illegible]けく皇[illegible]代の業と称へ、[illegible]歳
と称へる理、

武蔵野

ひさ[illegible]、[illegible]と描き、[illegible]に[illegible]
もサ[illegible]、皆人ハ[illegible]、[illegible]に日を送る、
智慧[illegible]き人ハ、[illegible]
[illegible]、[illegible]人[illegible]、[illegible]の玉を磨[illegible]人と

島津日新公作と[illegible]

生れ、甲斐も可しと、人まうハ悔く思ほれく、
太の老たるぬくにく、行果るこを考念ちれ、又ろれ
世代、ごけの世のみくらを、考まれぬ世ふことある
う弟月巻、殺く言葉のつ、ぬけ方なれハ仮令高位
長者の身とかりて、七珍萬宝こちくて、蒙花
にやこるも、こと、一夜の夢乃如くなり、歓楽
極りて哀情命、と、古人の文ふこと、思ちるこれ
ハふや、生こ世これ、こと、こんのくろ乃月乃花、
これ、ぬ、むくとり、會者定離生者必滅

世の事ひ、事ちり、仏、悔の時、そこ、果敢なき命
うる、世の中を思ハ、貴ち稲妻のちらとするまれ
ひも慳貪愚癡ハ、遠ひなり、引よせく、法ハ
ぬの高にくこと、ハ四の雲系なり、ゆ、ぬ、足
れりとこ、おれこ、ハ、月こ、ぬ、ちく、夜ち、
十六夜の月やくの月ちく、

春日野　　仝上

春日野に、下ちこ、ぬ、ちれ、年の尾ぬく、花ぬ、
霞ぬ、りる片岡小、月ハ、ぬ、て、雉子なく、ぬ、ぬ、ちの方

清白君の代と雖も、猶ほ八幡殿小弟、市山の栄之久
しき松井の、落葉のうきとゝまらぬ人の世ぞ小川
代前の霧、深くとゝめうゐ(イホ)ぬ名を世代よりひとゝ
に西つる蓋代、彩る都、遠く富士の峯、雲成遊業
山とはうらひろる、七宝の八彩を潮水に浸し、
本これ相も蓋破の屏風上小海ひては、兎も走る
波の上、瑠璃(リヨウジユ)粉霧沈としては、蓋本小昇る風情うゐ、
五風平ゐの清代の蓋四海もゐひく世清風形の
海日出代かし、蓋ゐ代ゐと、形ぐぬるものゝ上枝

なるうゐ

嘉代ちゝく

新玉の年代路の蓋や、昔ゐはゝすゝ代ゐる留と
清これ蓋まるて、蓋の長ゝく小竹えつゝ、玉だれ
ゆゝく風ちゝく、舞の袖と蓋ゐすり神の井垣の
老松も、枝と遠く称ゐ、宜(みべ)と太夫代新ゐ、
齢と若小西つる蓋の若葉の、ちゝ蓋のうゐたぐひるき新枝
に受ける梅の枝、ゐ代蓋の色のうゐとや、庭ゝ
ゐる白雪のゝうゐ小、梅うゐる、好文本代

名小郎に、又高砂の住の江に、松小お生の尉と姥、つゝせの勢り赤石くに、天乃たかゝに引れつゝ、四方の海原海なきて、ゆゝと静けき世津風、樹こなゝ見ぬ古代の素、名松と共に八民弘まて、前泉乃に、命と延る事、ゝと、年の舞のいる湯くかはす盃、君と市国を祝つる歌、松葉こそ目出度けれ、

毎の歌

高崎正風翁作

やゝ正りよ正りよ、ゆきもゆきとも、たゝまひて、父の市方と、ゆゝ、ハ、ゆ末の継徳小橘の、実れなる

祝ひてん為ゝ、吉野の山乃美れ屋、光りハ見る世なりとゝ、幾代市樹ひ多へ、柿氏の一族乃ゆゝ、ゆりハ君の為、驚れて止めとの市遺言、あたゝ小かゝ、と立ゆり、涙、妻小告ゆゝハ、を石れ根ことかはのゆ小、早くゝ幸忘れゝの恩ゝ、紀を思ひて、忠と孝と共金ゝ、君の市心安せよ、祝の市霊もなくゝめよ、

まさゆ紀とゝ市学まひて、

天長節

金上

三大節の祝ひ日のゆゝ小ゝ世たく尊きハ、三千餘

万代一族ハ我父母と志たはれく、三子俵万の兄弟と、我子とおぼ〳〵しく、皇帝れ誕生ませる、天長節のとるそうし、天津日嗣の虎栄えハ、天地共ふかけ〳〵祝と、宮ゐり日れ雲霧ふ、うるれ〳〵ぬく武士の、をにおちたりし〳〵改めとに、うりて檀原の、聖の市代の古に、たらまるうりてと栄えけり、大きん代八十隠ふ打ようせてれて塩沫の、凝りたる国の宝人も流のゆくり通ひ、医師法律農や商よりはの業と開けて、汽ふハ清船陸ふハ汽車ちるの中にと

まとたらけ〳〵ぬこ千足の国と唱へ〳〵し、家に学ぶ児童もおく、邑に学ぶ者もすし、電線こうゝ

ぬ者もおく、秋夜かゝ灯もり、尾形の燈火掛くに、よりそ、ふ市塾功ハ、不二のゆうり

ゆ行きく、伊勢の海うり、鯨もれ

伊藤門に、建て作けや市ゆ代きくの鰹

とり〳〵に、ほく〳〵ぬてる

作者不作者

日嗣ハ国家の紀元節てふ題のすたるものなしと
言ひ伝へられて、都合あり〳〵来文をとりすて
られたるを以て、新〳〵学士により著く題
と仰けや仰けとなり〳〵きものなり
仰けや仰け天地の、あ〳〵登りハきそうえむと、天津
神の宮〳〵、勅のまゝに高坐、動うぬ基ひ建初
〳〵神武天帝ハ智仁勇、兼備へたる君ゝて、皇祖
瓊〳〵杵の尊より、日向の国に高千穂に宮居定めて
政敷玉へれと恩澤ハ、まだ浮ひはぬ国角〳〵、邑長

国に卑〳〵ハ罪なく民の苦〳〵を、刺ひ助けて天業を、
押廣めまゝと雄く蒙も思ひ、たゝして詔皇子たち
と、大海原をひらき合ます、西の果か西日向より東指て
出たゝす、浮稜威の風小なるこゝ高ひ、なびき降ひ
新敷戸畔、兄猾、熊襲、土蜘蛛、長髓彦、を亡ひ
けり、大和の国に橿原に、新宮を造あ宮柱太敷たて
浮位小屋〳〵も重ひ、多〳〵に国を定めあ天の下、鎮
め国ハ大八洲、又波風の荒きを、鎮ひ民ゝ、安民ゝ
服従て、初国知らし天皇、あうの尊こ天地の、別れ

しかくのごとく君臣の分定まりぬ故、我跡のごとくに
玉とゝのへ玉はゝれしとも清安の、玉れ名負ひて外国
の人をうらやむたぐひ多き、世を建たる天皇れ、
大御熱切小はゝては、畝傍の山を高うしゝ、植安の池
も深うしゝ、四千餘万れ皇国人を、新しう跡
に、受し恵をと忘るなかれ、うゝ、うゝ、忘るな
かれ、

（以歌の下に同上に二字脱ル）

湯陽江　　同上

うらひあしの葉の、秋の哀れのこと過うル、

湯陽江の夕雨蓋の報出を送り来て別を惜む歌、

年宣なれと命ホ乃、尽てゝ、なをなほしきり、
ホイ
ホイ、ホイ、と呼て、彩雲を赤き波の上に、序歩
守る形しとあれ、忽ちゆく雨の養者乃詳、留
掛ぬとなれハ、亦ふん惜きて、泊むことなりとし、
云れ、果ては、雲霧、孫て、雲と、言ふハ、歩
ひそまりて、ゝ、舟漕よとく、湯を、焼
火の、色又更に、裏の、遊歩の、元き、養者のまゝ、招け
とも、頼に、出こゝ、百ゝ度、呼ゝ、れて、志岡

にこぶたの母に抱りまゐ袁を抱きてまゐば
ゆげ面を撥ひ厚て初りて撥音ふひ動
らぬ涼き情のこゝろつく隠りまゐに常られ
おのの内代しんたき張、頭へ出る人物せり、くこと
ゝ絲演末端の頁、言かさかるゝ紀号ひ穂る
然のこゝりくを四筋代象にいけ〻〻愛、輝く対
四ゝひ移り、拂つかゝ多つ初に、覚裳を奏
ぬふハ六么を浮〻けり、

大絃嘈〻如急雨、小絃切〻如私語、嘈〻切〻錯雜彈

大珠小珠落玉盤　間関鶯語花底滑　幽咽泉流水下灘
水泉冷涙の顔凝て泉と絶え、声付〻詳かゝこを絶
はずあにうしひ張情〻て、詳かゝるゝを中〻に、
間情とを〻〻水〻ゝあん、暮ひ雲く撥の音、銀
瓶碎けて水迸り、鉄騎突起りて寸前の刀槍を削るに
髻髻たり、曲もとけとゝりし城撥を収めて四の緒
張只一聲にのきなすはゝるゝ帛を裂如し
東の舟も西舟ゝて只情然と聞惚れ〻〻船の人
もあしはこゝ行の濡間身ふ〻〻く、水底白く

すこしまさる、月の新しき雪にうれ衣をつくろひ
居なほりて、語る顔もをかしく口籠りて妻もかハ都な
る、蝦蟇は陵下の蓋れ物にて十三歳の頃ようやく妻
をもの上ほと世に知られし宝を飾りる宮の内金と
愛けの堂ふと、ゆく登せられ遊士のかりしこ
ろは曾ふと招きよりて戯れあひさしあさ
かけ陵辱、かつき論てハ家も冨こ身も栄
えつ世の中ハ知あるものと愚うあつ思ひ来
みく花の表、お墓の秋と等閑な日を経るほに

同胞に、孔族に離れ夕去き、知まりて新花の盛りもつ
こすさの門、馬もまるまる色まるハ世流るたつさ表
累て、ものを落なれ根をは隠え小のまり、蔵ひきて
情と涙をもくを夫とするたかはるるこ紙をそ大きく
旅立ち、ち浦船小夜を守る屋ひるに水をこ、ひり
まくにまどろめ、ひうのうのうの愛ふ見てくいとく
悲しき場りぬて、語る紙けて見はしとも太きなる
いさはくと、喪を紙守なふ思てこ紙ひ船語
れ哀れさ始めて愛るち人と方れ隠こそハ替れ

ともに、月と日も同しく清浅く、玄鼓よりこそ入
流離(サスラヒ)て、浪花の片ほとりあしと米のはまひし
けるに、山路をさし中に家居して、旦夕(アシタユフベ)にゆりものは
高嶺の猿(マシラ)子とびかすし、樵夫(キコリ)の声や総角(アゲマキ)の吹鳴(ツキナ)
に笛の声をきくにつけても、胸(ムネ)を痛めて、病彌増(イヤマス)
ん境して、着ゆつる衣手の、さながらつゆしく思ひ
しに、こ宵の君の舞楽の声、天津乙女(アマツヲトメ)の声楽
とぞなん聞えしていたくしも、おもひ心ともくらし一
つ、深く吟せよ吾(ワレ)も又、哥を作りて贈らまほしくいへ

は哥ちともともはかりせむ又も形もある諸音は蘭のらも
ようにこそのしく、幽邃(スゴ)けきは江吟の司馬は文
ずり並居たるを今も神代ぞ忍ひける、

小督　仝上

ほしき秋の夕に、空語め霧かゝる山神の、波の露(ツユ)を
拂けさ路の宿直(トノヰ)に侍しが、源仲国と召さ
れ、如何に仲国に小督が行衛を知りたるか、内裏を出
きもしより嵯峨のあたりに聊(イサカ)の知人(シルベ)侍りて
まりと承、汝いかにもして尋ね出し文(フミ)傳へよとの仰

なり神国けくしきことの世のまつりと并にくしきものの名とたふときことはかぎりなきかぎりなきことを皆の原ハせかちまたなる程にはけとれハ高山の最中に君乃市上おはしまして、調（注はぬとはよもちろし、先ずと自にも多心もちて、慮慮を休めまくしむとんふ多の意ありはく、喜うぬとすえあけ、即て直ちと居りぬ、察の市馬にあ乗りて懐かき貴に親とあけ、ふ霊鳴くも山里と雨しけむ

嵯峨野の真ふ口を見れハきらめき輝る白露ふ、長花の神し
キしめ、金時の月たる中の言に、注世の善悪ふ見ま
て、狩り人花酒めて、家ちとに主ちて問（と知ら者
更に知ら、何はきしと道伝たく、蔵ちとしてあろ
ちのハ、ふ一宮社ちにや見はとちもと、亀山近く取り
しに、蛭植遠とすえたろう、峯の晨の杉の梢ふ、
る君代きの言の葉ふてりハ一村の杉代う毒ふ名月ふ
穴、中とすの中ふ水音と多ふ流ふ、ちくとぐけハ
滅や月花の夜の意ふ、ちて、峯の夜仕ちまろし

慥ゞ覚えつる洞ふて膝叉あハ無意意なそはまあれ
もあるしとて揚より勃発ぬきこそくむし計ら
いあるしやかて跡より発りてつとほりくと叩
きバ是ハ仲国内裏より御使ふ参りたり明させ給へ
あけさせ給へと詰問(オトナフ)ふ参り来せし撚ぎまうらって
書まりしやゝありて隔(イタ)の戸しやゝ小安房門を細
目にあけられ討手參り、して扇子此難の棟せ展
に内裏より御使あと給仕る(女)にあつさの道にや侍
らんとひつる仲国縁に展しすそ侍きれ中と思ひ

けきハ平佐如く押明けく内ふ入り、哀なの様ふなきよう
何とそかゝる雲上にハ御譚り侍りつて君ふハ明暮(オボ)思し
沈ませ給ひ、御やく供御もすしまさて、御解(ウチトケ)御寝(ギョ)
寝(シン)もなし世給けとほとして、御命きく覚束なし
こ程も入り給へれ打ゝ古ば上意(ウハソラ)にやむなけらん
と、御消息を参らすれハあらなりつ此御所(吟嘆)
やと、御文都ふあて給ひハ忘けしき鶴も涙の雨に、
晴たる月も曇らるらん仲国もそくろにせきくる
涙を押へ兎角御ひあらしせつゝ上の衣(キヌ)袖引ハ給り

にくらしやかりくるうつ引結ひ女房の裝束一重袖賜りけれハ肩に掛考ふるとそ袖絶ておけとそこの宮殿て市遊ふハ多くしく袖を結へとうひすてく袖紙界多くて立帰りありし次第を賜りおく寄する紙にかめくと秋の長夜長恨にかり付の考慮こ物をよろ程、

山家鳥

此家ハ藤田東湖翁小梅に出因せられ村回る代時の頃とく来て人間にとく賜り

一家のうち

山家鳥につまの名殘をゆりもてくれ方ハ考を武蔵野の考るる多に知くく家の涙小便る神の面かけく

のまとそ人あり成代とりく見ひかそれ物とと思そて

八社のかりと紀を無ふ当時の見ひふハなくく伊

吹のこ一ところ思ふ色る見ひハ陸奥代人目を見て

文をそんと考る考ものきそをとんの宮章代、

ありやかりやとと宮しすとる面の海代考る国

ひ世のうきを代ハ考代ハ考代ハ考代ハ考代ハ考

ほきとれあけられぬかぬるとまつ代をいか
梅にをとひそめ蔦はうるおふ春の雨を初まて
あまつ子五月晴なれく降てくさ草の代の雨ぬ
ゆ代ふにかりの福

元寇の仇波

作者未詳

我日本ハもろ〳〵、昭代の御の国と名とく、天津
皇祖の賜はれる最とも尊き神国なれは、そう輝く御国
新羅〳〵百済の基代ハ、皇国の臣属ぬ神ゆ屈ぬ受
しとわある故元の初皇帝忽必烈いたくとあんて使

臣を責而たり〳〵敬畏ふ奉り、我国成ぬ
ひけむと以ひこと代ハ、小象無ふ使を〳〵くと国の風
をはふる也てを、無ひ使ハ新ふ名ふ使を怒ふ使を
して、弘安四年の秋の比、蒙古人ハ海ふ使波をすく
逆巻きあよ也てく、太代新羅高麗とをとく渡りく
海〳〵軍船やとを数の日のうすをとを一陸頃りて人を
けるすゆ峰て責来とをとを、実ふ最れぬ久来の史
ら、強きりふ武君の下、弱きりふ武君の下、
臣人ふとをとりる人和竟見せる事と、そうつ代ハ使

立ち、合せうちしかとうちと、たちまち神代野原に、雲
白くまわりすかさとうち、耳とろうすり雷代、雨降時
せうの麦太鼓、波浪澤うち也、風の、時ひ助くる鯨波代
鬨、鐘きとうちき天地をゆるがしてうてうしきうち、
黄素(セリコ)し、仇の十隊、第一、又小勢を海小却うち、罪を免れ
る者、僅三人とて、仇人、今うたれ、明日たれの、あれ小、
麦畑人、敵畑の市、稜威(イツ)とうちを、ものれ、ものを、
ぶうとうし、者(イト)と、捨て、登り、勇ましうし、

台湾入

西村天囚著

皇の御稜威ハ四方に輝きて、清国遠く和議を請ひ、台湾島を
献上し、合戦(カセン)茲小定まれる、君うち代、を目小、我れ、台
湾島の土賊共、ならに白人、蛸蛸の斧を揮て、すえしは、
征討代師をとて、ツカハ、近衛兵代、鞍馬代、辛ひて、出張ある
し、陸軍中将大熟位、小白河宮として、金枝玉葉の御名なり、三
貂角代市上陸、幕営ありし、手跡小、木を削りて、記きて
炎熱焼うめき日に、三貂大嶺の險阻を、馬にもたすず
越えうひ、大雨降り小、降ぬ、濡にて濡てをきて、士卒之
に難儀し、病兵(崩し)、立上り、命を惜まずを、軍すを、

八里に拠りたる賊兵共の射出す弾丸八雨の霰の白雪の、降注ぐかと、砲烟暗く天を蔽ひ百雷ひゝく落るに似たり、宮八矢石を浸し、突貫せんと下知あれ八川村少将小島大佐を初め、勇立たる近衛兵我先にと奮進し、賊の本営に突て入る、賊兵之に氣を奪はれ、右往左往に逃散て、降参するもの数多し、大砲小銃の戦利品山を築き、今計りにて、鯨声(カチドキ)揚げ、八宮は此時無ゝ事として、基隆城へ入り、此月十日に八、白北城を陥し、七月朔日を以て領一、おくる八月に八彰化

を清国兵庫を焼き、十月初めつゝ、市中騒然として、天地震動して、輝嶺(シヨウレイ)多く、粮道絶えて、千辛萬苦八、言葉に尽し難し、八士卒と食を同じ、畳(たん)八汗馬に鞭を上げ、夜八草野に露営して、我衣の袖に月を宿し、嗟歎の音(吟声)や、所の関山氏に、為に、鶴に親苦を続せん、遂に、小倉小隊を、以て、前に、立て、敵人と、歩を、進め、敵人も、防ぎ、切に、奮戦せしも、宮は、ついに、宮中の、狂して、賊徒平定を

召ねらハ彼今台湾は土ふなれハとて、吾の士卒
とあすへくハそか邦ふ併しむと如き勢ふあれてす
まむるむけ條約のきもふ賊徒平定と功しあし、
宮はふつとす必らし但ハ前業ハ唯一瞬の呼ひ間ハ
しかうにほく躍うく天ふ登り世治ハ倍々雪日本
武の鋭ををも目の前ふ見えるとせハ亜市の民を兵に
勧興せあハあかうくらハたらあるきのみらなと
是あ務と花少不宣ふ益ハ敏かし、其人ハ忘ら塊をて
久し皆人をし、先ハ没千載ふ残りせるの

台湾懸く仁政成　皇軍到処湧歓声、旭光将被台南地、
殲彼渠魁安萬生、
と宮の揮ひ給ひし如く、盛功偉烈後の世ふ輝き渡られあ
ほうしめ如し日河の水ハ絶して海しは将し、月影形くすら渡
ありさまハ代ふに流るるす、

嵯山　　　勝海舟翁作

夫建人ハ大観す、稜山蓋世の勇あるも、栄枯ハ夢の幻なり、大
隅山の狩せしに、如の屏も新清く、無云無為の観あらし
すふ使ハ想ふるの概れ、職うに激せる数るはぬ、萬きに為し

鬨旗（ハタリサ）の騎帰の勢ひ一揆に、…より難なりし
此身一つをすてゝ、ふる國はれた報ひる事、明治十年此（トヽセ）
秋の末…の…すなれ、討られつゝ果て報る、哀の紅
葉の…を…とゞまる薩摩武将の雄詰（ヲタケビ）に
ちぎる玉ハ板屋ちつゝ、ちらし乱るゝ如くにして、面を向
む方そすらし、木霊（コダマ）に響く鯨波（トキ）の聲、百雷一時（ヒヤクライ、チジ）に落る
如き有様（アリサマ）にて、陸盛…見て…気…勇まし、此
人にや、去の年以来…ひし勝の君も識し…
に…ることもあらし、いさ…に…塵の世…脱…せん

ハなりとも、ひとつ…とも如し、

孤軍奮闘破囲還、一百里程塁壁間、吾剣已摧吾馬倒、
秋風埋骨故郷山、

と詠し給ふや、吾祖野村田を始として家徒の者…に勝と
消えし大丈夫らの…勇ましけれ（…）…之と…
見てその…とハ陸軍大将と仰がれ、君の寵遇世の覚え類
ひなかりし英雄にして、…の…ハ…の、山…に消え
はて給ひハ、…世の中に此…と…
…ハ…も…と…一日…を…

ちり、好しとあんや城山松の夕嵐、岩谷小鳴川谷水代、善信の解を何とかなるべき、悪所千万とすべきなれ、
戒衣の神仏なり、涙ぞ、

謀の巧

天皇、日の新うつる玉、名野代原寺清澄の山、
皆ともに武勇忠義の人角、之弘年中代ちうとく後醍
醐帝代三の皇子、大塔の宮と申さるる、ハ世家の者にて
きしませと、父の巧る玉の命、義高に奉て逆臣を征伐
せんの巧企すること、賊小源四方代伯耆殿、

三長義明

御厨の奥にも南北せこ、身を重陽ふ、終く、熊野に指く落居
八、殿脇の人ハたまて、赤松律師、光林房、木寺相模、三河掃部頭
八郎、武蔵坊、平賀の三郎、矢田義七、村上義光の九人にて、柿の衣
に数を重ひ、錦中眉深に被りて、先達、修験、山伏の態、
小準（吟哲）、誘、楠鳳闕に成長、誠に勇まを出まさぬ者上人
代の歩り代長途の巧、の人々、思ひに、社れ
巧形り、宿こ代巧、為め、寄せ、寄り、代代、為陽代、
も、見咎む、者、文に、ハ、中、の、の、を、代、沖、
揖とた、浦の浜、本陽、義高、と、初、ぬ、陽、小、

紀路乃奥山路にと露霜の幾代の松にうつりゆく旅の旅、
和歌の浦上の浦さけく、月に磨(ミガ)ける玉津島山の浪の音を
に聞なから長汀曲浦の旅の路へ心を砕く身ひとつ、すら
金剛山の郡村の旅夕を送るそのころの隨身を催す熊野(タゾカ)に
切目の王子に着給ひ叢祠(ソウシ)に袖を片敷て、終夜礼拝を
なしまゐらせられ、かくて十津川の戸野兵衛が館よりて、暫し
御座ありと云へども、あらず、かくて年を送りの方へと落給
ふ、熊野の芋瀬の庄司とて賊に一味の士、宮を遮へて申す
ず、此所を通し申す事ハ、御供の人数を減せられ候へ

宮に仰けるハ、如何にとも思召れけれハ、錦の御旗賜てのたまはくハ一人(ヒトリ)
此御供をも止めて証拠にせむとて、以て殿の方へ給ふとのたまふ所、其
御許しにならず、つき給ふ御旗をば彼れに与へて帰給ひ、
惜みたまひける、かかる所に、村上義光ハ草鞋(ワランヂ)に
御旗や切れにをくれたりしかば、宮に追付申さんと、足
疾(ト)く来る折しも、庄司が家の下人(シモベ)ども御旗(ハタ)を持て
見れハ錦の御旗なり、不思議に思ひ尋ねるハ事しりなく
と奪ふに、村上之を付けて怒りて大眼(コウ)ハ
にあるそかしけるなくそ、四海の主(アルジ)王氏(オウシ)天子の

御子が骸を追討あらせらるゝ方にやつかの店なるに、御分めき下
乃ヿ宮がゝる旅着すゝるのを、持する挟鉄をかろひ、丈の男を
攫攫（カイツカ）みて、四五丈計投たるは、獅子の荒（アレ）しに異ならし、式怪
かに思ひけん、婦が涙を目、一言も言句をあくて辣（スク）みける、
義光御旗を肩に掛、絶ゐく宮に追付て御前に伏
し事の由具して申上しかは、宮は甚く悦ひ給ひ古の、仁
宮黝の勇気によりて立緒（マサ）しめて愛（メテ）ませぬ、義光ハ勇
けしからぬ武者の其の鉄に宮に代りて討死し、御旗
にあたなる日本と、見る事へ忠臣と義士と称（タ、）へて萬

代も君に仕ふる人臣の鑑とこそハ師うられ、鑑とこそハ師うられ、

安諫る　　小田稲植篤鳴

昔と見るゝ鉄此人なりしいへは、謀反を待ちて、馬に衣ひ兵を練り、
糧（カテ）を収めて剣を磨（マ）ひし、時ハ天正十年夏五月、徳川家康卿を
られ、安土（アヅチ）城下に入りしは、織田右大将信長ハいと鄭重に迎へん
と、太刀（タチ）に惟任（コレトウ）光秀に饗応の役をぞ命せしかば、光
秀ハ謹（ミタ）れする世に仕えし、卿の手振（テブリ）をはやと、せしを
目ありがあしとて小人は、此言（ゲン）によりて、喜ばせる事の酒宴
疑心（ギシン）暗鬼（アンキ）ハ信長の胸に生じ、彼と羽柴秀吉中国に出よう、

撥けの吾と詩ひしうは嚴命多ち光秀の首への上ちて
りけるを光秀秘うに知りしかもうしよ我小明寺う余
に迫とは、あか時すき、我男やと、蓮嗤とをして恨ミしハ、
男ふ仕つる人后代よりもあるまし紀まをなれと、又信長成ろう舟
ハ右大將も仰うろ舟小疎暴の振舞と為くあるかハ蘭
丸をして光秀の首へふ、識扇と形くを殺、又或ろ舟ハ
海仮珠を以、我妻仮通して勧めしめ悪業の報の餓鬼を、
ミをのうちにハ事ふくを奪ひ而も奉行ふ又産
を傾けく、野なふ事うし家産に人夫ハ
殺害湖の水代泡と消え抑へし焔むりくと、ある男ひの光
秀の養仮猶りて立とち、高く目元の男より、中ち愛大事代ほの
見えしを、霧能知ら仮信長ハ信忠と安土にとの重、密ろを
長西所人引隨て、く事能ろる、が能ろに入ふる、世を、て事ハと
光秀ハ田舞も怒けぬ嘉山ふ信ふ光秀ハ、ほろ寄せて、徳
ろ恨くしの報くと、野ろるうちに光秀の眼ハ無汐ほ、ほ、
逆立髪ハ冠と、突く驚ひをろくとうと、光秀五つの百ろ歳、
傳ろ文書も捨ふ、捨て謀ふ加盟さを、暴戻事ろの裁
逆を、企てしうを消ま久ん、訪て士卒とお揃へ、ふ

戦に稼げんと仕り申し、大江山の路と烏帽子の嶺を急く計りにて、さしも義の老者の迷ひ年を老たる坂路なる路や迷ひ乱むと、手を組の脇に巾、着て渭の桂川、渡むの足弱しては、東西てをしける。

本願寺、淀城、天満、雲、堺、四箇、梅田、天満、雲、堺、西宮、摂津、道、播磨、東、指天、尚早、

我敵、正、本願寺、敵、正、摂津、

爰に、初て軍勢、八、御く二心と見てしかれも我、見、

すると、命、八、月、二日、九、夕、さ、霧の、名、

軍兵の、軍勢、を、作りて、攻入けるに、佐長、八、

寝覚の、耳、を、たつ、八、陣、作りて、敵、乗、

寄せ、敵の、方に、走り、出、敵の、打、出、右、を、

見て、あれ、八、何、者、の、敵、の、為、

蘭丸、引、入、光、秀、謀反、と、答、

覚悟、と、申、し、矢、を、つ、

騎、間、ひ、た、敵、十、騎、を、矢、

き、も、只、一、筋、と、信、長、の、彩、

けを入る事数をするにうまれて来て後世、鬼角すること代
長山なるを代続に痛みとなる事、蘭丸代て拒くこと宿直代
考と悪く金谷的ふ戦（と）宗寿郎也、佐長八最早是迄
と和ひちん、自ら鎗に出て鎗の中に雀入く、双
に相てそ不ふけ吟味は書遠の佐長、立代と蔵けむ
大鵬代、国南の雲中に、燕雀の舞ふ様まされ、浮世の中み
殘之たる代物子身中代虫に働れたるそこと愛て人代
代、只ふ物を福まし、浮て蘭丸を神と、坊丸力丸の小姓
共、武士者本代桜花嵐代山の紅風にいとも高き勇、

ちりくかとやさき百方様人情共ふ哀れ知るの彩の鏡と
清ふ生る、

雁はるん中ちすかまず後是はるねちち代うる世の中
傳く古今伝物とたに人ふる事候代人ふ是は清ふ代事
て是清ふ代、

白帝隊

花ハ桜と人ハ武士前ふ人き世ふちとれハ世そかくをとも
ハ心、義ふ今は藩士の子伝帝隊と稱て八日野後
の学生伝、接接之て伝人くに年齢僅ふ十五六十七才伝

まだ幼けれど忠勇義烈の少年なれバ、其心の意に従ひて、
剱と銃とを携へて晴天を睨む姿の健気にも、三十七人団結し、
首将の許に駈付けぬるが此時は若松城、四方ハ敵の囲む所となり、
城内已に兵ハ尽きぬ、防ぐ術は僅かに老若の男女のみなれバ
彼等皆小さき身の命を君の為に捧げて勇みて
ありける少年隊ハ勇壮なる散兵隊の左翼となりて、
戸の口原に向ひ、群がる敵に斬りかゝり、物ともせず烈しく奮
戦せしが、衆寡敵せず、隊伍の崩れ、雷轟山岳を振動し、忽ち
弾丸雨霰の如く来り、兵の多くハ撃たれ、傷つきて、残る者ハ十余名

にして辛くも猛き少年の身、傷を負ひし者もありて寄せくる敵
は潮の如く防ぐ味方ハ九牛の一毛たるも足らぬ兵、傍らに一方を斬
抜けて、生残る者二十人、慶應戊辰八月の夜にて呉々の兵に陰の峠
を越え、越えて殊に夜に進み、要害ハ踵の跡を踏み、敗軍なれハ兵粮
一粒だになく、腹ハ飢ゑ、疲れ果てて身体の力衰へて、
飯盛山に攀ぢ登り、(吟詠)鶴城を遥かに眺むるに、火焔天に漲りて、城ハ
落ちたるかと見えし、懐かしき君も、主君ハ果て、父母
も自ら生き別れを告げんと、眺むる涙ハ先だつに似たり、いざやこの
ハ皆共に、且つ潔く、割腹して吉報を待ちし

短冊ハ、斯の如し わが一首、世の人あれと詠じ出しけれハ、篠田儀三郎も忽ちに、文天祥の正氣の歌を朗誦して吟じたり、目底に悩む石田和助ハ、篠田の揮ふ荒蕪と思ひけるにや、最後の辭とすゝあらしてこそしらん、

人生自古誰無死、留取丹心照汗青、

と之を同じく天祥の零丁洋の一節を吟じ終るや一刀以て小腋にぐつと突立て、もの美事に引回して、篠田ハ之を見るや否、秋水逆手に我喉を束ねと貫けれと勢ひ餘り、又林八十治、永瀬雄治の少年は、翁て交る深くれハ、耳互も共にと抱き合ひ、曳と一聲刺違へ、

永瀬ハ猶も深手をなんと、林ハ彼へと刃を加へて、諸共に介錯をこそ終りたれは、野村駒四郎も前の思ふ首を打落し、更に刀にて喉を貫き、腹搔き切りて果にけり、之と前後して何れも年ハ當る、花や木の冬は謂ハ花の、無情の風に吹き倒されて自害して、秋の露と儚く消ゆる如く、之の後に残る、先ず暴し魁ぞて戦歿したる少年共、隊は捨て、集め来て十九名士と為並へ、飯盛山の頂に、輝く碑銘ハ後の世に、士氣を鼓舞る基たり、詩を以て之を頌して

少年團結白虎隊、國歩艱難戍堡塞、大軍突如風雨來、

殺氣怪恒白日晦、聲鼓喧闐霹靂雷震、巨砲連発僵死堆、
殊死衝陣怒髪竪、縦横奮撃一面潰、時不利兮戦且卻、
身重衣瘡痍口啣藥、腹背皆敵將安之、杖劍間行拳丘嶽、
南望鶴城烟焔飛、痛哭呑涙且彷徨、社稷亡矣可以止、
十有九人屠腹死、俯仰此事十七年、西之文之世間傳、
忠烈嫌〻如前日、壓倒田横慶下賢、
[illegible]
[illegible]天[illegible]義氣と誠[illegible]
死せしと[illegible]

[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
白帝城、[illegible]
[illegible]
[illegible]

寺僧

良禽ハ樹を擇んで棲む、良臣ハ主を擇んで仕ふ、[illegible]
[illegible]

寺東六[illegible]

母方の祖父に出家したるもの、野辺の送りもいとなむ。寺にて送りたる。月日の多くもあるに、常ならず長くなりぬ。八年ばかりやうやうなりぬ。公の仰せにて、行ひうんとて、清水に参りたりしに、青色ひとつ、水に浮きて、参りぬ。世に生れ、墓の衣を着に、香花をとりて、併前にあるべきに、世に生れ、行男の方のもとに、

やはり不動の利剣を振ひ、人をもおどろかす。弥陀の御願きんくきんすべき世に、なほ、なほ、切なる者はすべし。宗生、清水に詣でたるに、いとやんごとなきに振舞て、行世ふ多用。揚一一と、後ふ不敵の人に、若かりしに、清水に詣て、俳徊して、俳素の人をおびやかし、ちから力に奪ひとる人の別腸たるに、人に立すのあるべきに、金銭慢増長して、宴を清水の歌書にまて、群集人を賜ふ。十四五計れ公達の後、陸奥へ立ちて、平若丸と云ふ法師、宮寄寄人、家敵まとたうりて、使人とそ丸をとるの、

けりしかれハ既れなく此夜此命にて不覚に候らハ無念の
次第なり小性饒き不すて此命よハたり思ひ立ち給ひしと思ひて
牛若丸の御かた寝ひてゐけれ姫らりれ識数を駆れ牛若
はかりこそあれと刀を取りなをし来るねまらへ程々ハ躍成畢
悠て寺内を立出て五条の橋にさしかゝる此しも秋の
末なれはの更け寒る川風身にしみて居すわる橋のうへ
折しもはかりしに出て行く従ふ人もなく詠めくころ
まさかもに詠み付けと聴より窃窺ありいて吹すなる
笛の音に詠まれたる無双の大将華厳の大謁当橋長なり

着るしけに御の雑刀数と実に牛若丸の御身に立向ひて
申ひけるは此方の悩人を取更て帰りかれハよ見る名刀佩れ
ならハ置にもつて来れよかは通り給せよしと
發と聴て立たりけれ牛若少して打ち笑ひけれハ此者
取て見よと護せすものをとおへと無念
ハ雑刀取りて討るに悪見小性の云ひ分の勇ありハ討く
すと切て掛る牛若聴すな気色なく静りに薄衣引の目
て太刀抜きて渡り合ひ暫し戦ひ疲れあかたらみ
すかくおかたにて一もの無双なしかひる時橋桁二三間

発をうつて肝とを消したりあるかされと中奴なれ多
年に何程のものあるべきとそそとて実に勇気武勇まして、
薙刀相長ふ遠直伸（えう掛くるを掛）ハたふはつ
ふをけ、裾（スソ）を掛（ハ）ずり越え、ひをるぎ法はいらう、
あるあるはをしらに世をつ、まるつ、起ふたをつて
蝶蝶のごく、ふふ敵（ヅガ）ふ小例ち、安要紙柳を要を
とし、ずとをとて、湯ものとに、ひをに氣力も学し書て
たるひををん、安義ハ薙刀をまるをを落をれ落をと
しをを立たりをるを不思議やををかつをんハ角をを

きに立ををを、義義為義ハ一海を神を義ひ
けしハ弟は源の牛若をを国ハ海（ウミ）を関ひ海ハをを
義朝の子に立（カハ）ををの殺ハ西塔の武蔵坊弁慶（サイ）なら
粗（ソコツ）怨ハ恨ハのをんしよ長をををと彼をんと義に
主従の約束結ひ（ムスキヌカツ）義経被こを牛若丸小浜ひて九条
乃橋へて来をる折く主家をとして共ふ海をれ
主従名ハ永く長と部記く、蝶夫ふを氏ましを
知ぬ人ぐ作るをを鏡、

吹雪の報（テキ）

力山城拔て、氣豊後に入て、秋月つの城の勢の為、歩兵を立
て聯隊を卍字巴と称し、大将を和の塵と号し
て、持つる所の二百餘騎、四方三十餘里を立て、秋月赤乃
東西に、縦と横に、馬の蹄に蹴立て、命の限
いつこの城田代とさして、色きらめく旗を立世の
人、幸不幸の幸翻と、くくて来る田義木飛鳥
に流く大味、小味麗敷まく、吹雪の吉は武士のとり
ゆう弦の音は、射出す小銃の音の矢よ、射撃は射撃を
我勝と、水乃剣霜の陰、実雪の消えて、人走勇
義勇の氏腹とか、中なる弱者こそ　大君の手なりと共に玉の緒
(崩し)
くくと下おすが如く、剣を見にうやうく威風すが
ごとく男子の下にも弱卒あり、きて、濁をうつ、中の足蹴
やう者代者凄く、愛の旗者代玉だに、掛ひ方に、愛いと
う戦ふ、ちらに、命風、昔や切りに、むし、凍傷、敗走く、逃る、
血汐に、ものとなる、ひ、武士、振振、敵に、為振り
也に、者の軍、戦、ものとして、引く、雨うつみ、馬のしつ、ひ、
に、ひ、猛軍に、ひ、ひ、ぬ、物卒、ものと、陸小林、遂山、焼む、青未
も、ぬ、軍て、者の、義、者に、敵、ものと、ひ、ひ、仮寝の、者、結ひ、孫、

ゆきめ、そは為ゆく、後きる者に頭されつ、柳本氏森も長
森もくとすきと無る所に倒れて、そこの孫、名を云
ヤ
ものうしろくとも、兼ひこたりは言ぬ、起出れハ有る
あすまを、髮ゆうたたちて矢の出く、髮ハ右筋に凍りつく、
眼を冥れ歯ハ噛くなりて、言ものなり、
玉の為者と戦ひたつれとも意切ハ言て陸奥守
弓矢ハ情神なりて、とうけうの武運をと、守も思
ひとハ今、最期の陣仕ぶ、くあ者ぬ列を世ふ者ら、魔
平れうみ徹時ら、驚く怪ふ、ますしのこまし、と叫ん陣長

は、海を隔て勝ちんうるかすとも我軍紀、是れハ世稱おのつ、
ちくりて、ものを急ちに、崩壊のあ下に、ぶりれをくて、五百
岩ふ陣ら、踏ふ衛陣人下士卒の者く切たる陣長と、伝遠
代氷にとりくしく、嘆き、通ぶとなりれハ、ふけ
りて、鎌倉の、長羽寺、ぶりて、陣ぶら、勝凍りて、
とこ、ひの徹長ハ、言うく、陣、百長者、機とりく、屋ら
の者、下士卒代ひりら、寺使、鄭ふ、あ者と、今ぶの
陣者、こ者ハ、言れ、ひとれ、忠義代の一筋ら、
ものの、ハ、言れハ、言る、者、陣く、八甲田山、言、

風は是、却て雪如ノ矢、孤軍欲破苦寒圍、銀城一夜将星墜、
二百、雄魂時未不歸、

多賀陸奥の守立群隊、君の廃軍と戦ひく、付まつの包囲
に義勇をとだくし、偉勲い為を代、日本人の花あん、
ちゆに書ル　大君ハ御衣の神に祭て、歴問の長成
けうくるれ、大丈夫ましやまれや武民の、誉と称ましぬ、
たけきうくみとうくをしぬ、

石童丸　　四宮納治翁作

月小村雪花小風、人のまにまにちるぬ、花を浮世にすち居ひらん、

義小鼠茶鼠は紀州大隅義経に、加藤主長千人
ハ今影法師、世俗をて諸国廻りに出給人、鼠小僧
ハ、ちやうハ思ひ付と十四年、父上高野に参り、石童丸ハ母上
と、父の小屋に頼をて、旅の暮れ九一殿ひるく、御く高野の山
石童丸、きうりをひて二人とも、時ハ色ぜんと、ぜんと、女人禁
制の山なれハ、せしめるとなく、母上成、禁を小鼠、ものせて、
石童丸ハ只泣り、人の神仏多をあり、暮の業師や、渋不敵、
長成金をつく、物ハ、海みぞ、さいけんうとあつて、生夜ハ
ソコ所小仮寝して、生の長風に、隙物、読めり事者と、告面る、

諸の者いとく方に成て、九百九十九寺こゝや番所の所除
陣佛、善薩紙金一、易ぬきと、父母と呼人ゆく、三日三夜
ハ日過ぬ、梵鐘ハ無紙、物とれハ八ツ時に引ゆ、仏ハ、松
ハ風の音ばかりとうゝ、

ほろ〳〵と呼ぶ声の聞きそ、父母と呼ぶ
と、ぎさうき善薩のよまれたる、呼れと呼れく、歩ひと
なくあるゝ、番所の掛紙越まれハ、ハ花紙方ハ数珠、
光明ごん言唱へ、ゆく、芥菅ゆんゆり板ハ上げ見ゆ
新と新ハ者の振神と、家祖の神と、ちひ離れ

うゝ見ゆ、ゆゝ見ハ、海ハ鎧しれ、ゆゝ見ハ、神ハ雛り
付き、ゆゝ見ハ、ハ山のゝ、ゆゝ見ハ、ハ口まに、表へ、張と、詩つ、さよ
代、表ハ見ゆ、初ゆ、海ハ、ゆゝ見ハ、紙ハ、ハ見ゆ、のゝ
う、新の新せ見ゆ、何ゆう、ゆゝ、ハ、ハ、ハ

和尚まうでゝ、流る涙にくれて、石塔をたてゝ、
父上のまへにまうでゝ、ひたすらに、
菩提の冥福を祈り、霊石に、
我ゆゑとゝ、つくり、記す也。
菩提は、寺年の秋、空蟬なりゆく、
て、世人、ことゝ、
ひき、
力なく、
言葉、

又、菩提は、
生者必滅、
勝きものの、墓、
涙、
後世、
八、
る、
ほと、
ゆく、

又、菩提は、
生者必滅、会者定離、
勝きものの、墓、
涙、
後世、
八、
る、
ほと、
ゆく、

新治世武山、ふかり郡宮に裏海く、磯山杜ハ七百も有く、多く繁茂
松浦潟、海ふ潟山捨ふ舟、引人とかれる事に為りしも
世ふ情へ行り　ウ傳の為ふ給ふ給ふ事と為り、為ひ登り
芬堂の、慶長福くけ年に成ける、法ハ寺に成れ、芬堂ハ為も有く寺建
立く為る、法ハ寺の為に、修濃寺に、修濃寺に、相模国に、相模国の、鎌倉
寺と名ふ為ハ、為く、鎌倉と為為と為へ、と遊て、行人哀ふ、
修濃に為る、元善寺、石高寺ハ、寺事に、鎌倉為ハ、寺と為り、鎌倉の
鎌ハ為ふ、戦ふ、戦ねる為て、ふハ黄の為為り、寺高大鳥
ハ為為、面ふ為ハ鳥の為為寺、

吉野落　上　編著

為ふ為ハ、為ハ、為と立田の、為為ハ、為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ、
為ふ為ハ、為ふ為ふ、為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ、為に
二條堂七郎の人名道薩ハ元弘三年正月に、為為為為為為為
ふ、大塔宮の日ふり、為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ為ふ

ゝく芸濃ゝゝ、敵を討れ、敗兵ゝの、赤犯に、ゝらく
攻ゝゝ、家義、落ゝ、ゝも、おゝ、金(山用ヒ)ゝゝ、ゝゝ、回く十
八日卯の刻より、寄手は鯨波をどゝと揚、敵攻登れば、攻手
ゝ、互に勇氣を振ひつゝ、宮の谷、佐家の岩に、畫(ハセチツ)て、
攻合ひ、闘ひ合、射る矢、楯ゝく、射ゝに、射立たれと、寄手は
兵は、金沢、新ゝ、坂東武士、親討れゝと、顧ゝす、主(タノ)働れ
てゝ、赤ゝ、ゝ、屍(カバネ)、累ゝく、ゝゝの間、息絶も、法ゝ攻戦、
無ゝ、芸、林、陣、屍、踏、朝、ゝ、ゝ、寄手、家
白若、岩、菊丸、足軽、共、ゝ、ゝ、金峯山(コンプセン)の陰、越之、

本は、根、異、節(ヨチ)、蓋、ゝ、ゝ、寄、ゝ、ゝ、ゝ

と雲途と戦ひ給ひ、寄手は大勝と、廿三千餘人が切たくられ、風が木の葉乃面を吹くが如く、四方、親と川ふちり、宮は[illegible]堂の大殿庭に無くと、川端ひろく軍兵と、雲霞の如く酒宴仕て居給ふ所に、武蔵が宮の方乃着背長八七篇の矢が雷鳴と、頬先と二の脇が二ヶ所の突疵負せ給へと、立てる矢と抜て捨ると、無数も拭はせ給はと、面は上が高く、大盃に成て、たび重て、傾を給へ八木寺は相模四尺三寸は左乃先が、敵の首と、とて過し宮の方前よ暮り、拝ぎ[illegible]た酒へ中ノ、

戈鋒剣戟を降すと、電光の如く、盤石山岩と砕すと、急雨の如しとい（へ）ども、天竜は身が小近ければ、都く除羅法を捨て、為ふ所なくと、太刀振うて、斬たらば、漢楚の鴻門が、楚の項伯と項荘と、剣を捨て舞し、樊噲庭が立ちて、幕をかなぐて項を伏、眼ゐらし勝ひも、訪やと見回るけ、

仝　下

去程が村上義四郎、義光八幡ハ帝ハ、弦ひく敵が矢十六篇仕射付し、賀茂帝は篇が、神楽の節より初く立たは、拍子に沙も玉蔵の風が、ちひらの如ちり、矢と接が

いとまなく宮の内に籠ふせられぬ、一の本戸は破れ、
今二の本戸は少て支へ、こゝに遠国の義小冥兵衛は、
籠城党衆を、敵四方を圍ねらひ、落城せ給ふ
由、こゝハ北れ角兵衛すゝ、こゝにて、こゝにて、
市郎の具足弘義、市郎と、相ともに、義小義
兵衛と、忠義面ふ、ハ、こゝにて、こゝに、
宮ハ、こゝに、こゝに、こゝに、こゝに、こゝに、
こゝに、こゝに、こゝに、こゝに、こゝに、
こゝに、こゝに、こゝに、こゝに、こゝに、

之せうる涙を押へて、水戸の梅小路をとり、大青
梅く名乗る中、我は是れ　神武天皇より九十六代の孫今
乃帝代第三の皇子一品親王部卿尊仁親王なり、逆臣奴
にかやまされ、恨み骨髄に徹ひ、世を忍び自害するなり、
是れ程久く迷ふの身小柄だに武運尽きぬ、腹を切んと
手負の重傷にせんと嘆けり、浅井梅て拵へ、珍
代無双に練貫の二重少袖と引ちらを徳肌拵て一刀
をかの腹へぐつとたく、其一文字に引まはし、あをり
潔ち腸、梅の枝小拵付て、大刀を突立てぐつ伏した、

物して居たる義光の、高拵の脇差を抜き、敵兵を
切くく、大塔の宮代、内自害なされ、
に、四方は関所をきく、樹のすもとに定義自宮ハキと引ちつ、
天の河へと落ちゆに敵兵百餘騎追蹤とくれハ義光
代一ゑ村上兵衛尉義隆ハ父う敵小拵く、一人落ふ階とく
まり、追来ふ敵の馬代諸鐙、薙て切りを忍、平蹲ひて
ハ刎落し、右へ突付を左へ蹴倒し、花蝶の如く花迴り、
鞭所代ぬく手もとりたく、大刀ふりかぶる、あを小五百餘騎を引
受て、奇ちうり支し、しかして都陰陽の若とは以分

後ろ姿あるべし八海の底に失ひ十餘年の秋の月に成ぬ八海の底に失ひ
ぬれども月ぞ澄まれとや思ひ久しき、蓮の葉の裏に入て腹搔切るとて失ふ人の心に成まし、宮ハ帰り給ひ遍路に成ひ、高野山に籠り給ひ八村上天皇の御下り給ひ、
花と咲ぬ実を恵(イサヲ)ん立男の袖に於ては恵の、蓮の葉の裏に失ふ
ものとぞ思ふ、

海藻集考之一終

明治三十七年一月十五日印刷
明治三十七年一月廿四日発行

定價金参拾五錢

編者　芝区愛宕下町四丁目一番地　吉水経和
発行所　芝区西久保巴町六十一番地　錦舎
発行者　芝区愛宕下町四丁目一番地　吉水経和
印刷者　芝区愛宕下町四丁目一番地　吉水経和
印刷所　芝区愛宕下町四丁目一番地　松恩斬

不許複製

吉水信義